篠山文庫

序

永き代の昔紙衣袖乃重乃
めに古まくはしくかきそめぬ
をくくをのをさえ連りを梅木に
のせをく梅柳のちる妻を
をくをくをのをる

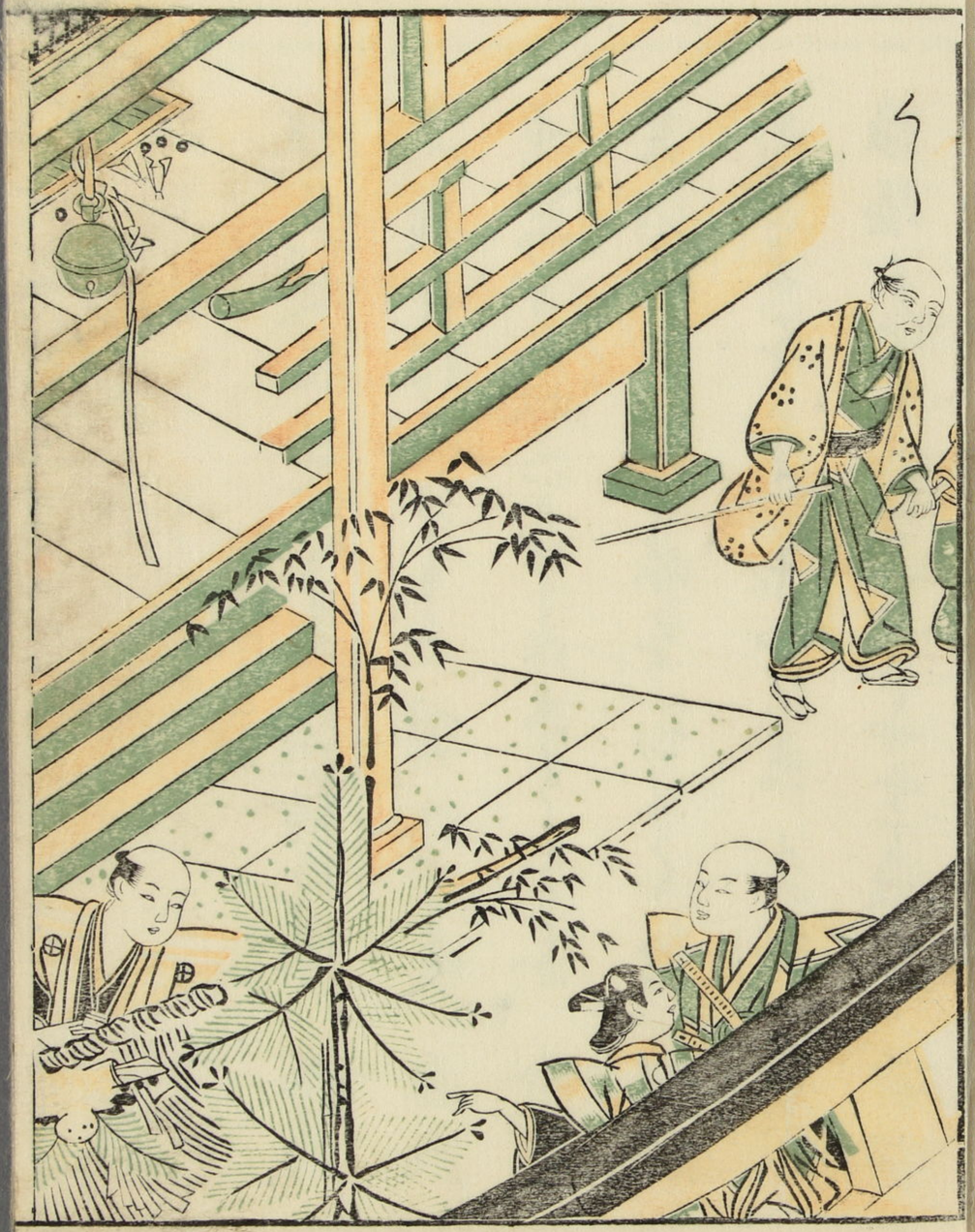
一推舎
雪淀

雲英文庫

福ゝ屋　雪淀

ふゝつゝ者ゝ

いちの



歳旦

ねさかしく冨士も書こそ千松の春　春潮
末廣やはま紅葉の明乃美　雪鴻
十かつてハ松の彩こそ赤ふ　拾翠
万水や通和の眼を元くく　蝦明
あ〻玉を磨あ〻や君ゝ春　芳樹
横蝦ゝ爲帽子すゝや千ゝ代春　梅郊

元日や元禁のゝ之麦皮　宝帯
唐藤の香代淺ゝや賛平同代格子鴻　芳山
安〻ゝと日ゝ生ゝ之ゝ之所用　丼棠
初夏やゝの吉糸も芳〻さ　鸞臺
ゝや今年ハ八百屋文屋八重霞　佳風
長湾や波の古ゝくハまの美　佳丈

其引

完示くと推も是くう歳の且　不計
葉蓮を物へくり弓矢砂鷺　渕鯉
蓮葉やくもぬぬきの玉所　吟洲
喝と吐舌あくしさ且うふ　春来
皮ふとりくやれの松うり　試川

碎ゆて庶くゆ初夢くるる帰馬　万亀
初空や寿袍よさりる竹の青　氷壺
明て爽机乃柿も二くら　長梢
蓮葉り玉結んをあうるうり　笠露
ならう玉北花のかくりや玉挽　東扇
虚空や阪泊の口解く爽の弱　存義
歓上の月毛嘶やくほ日　新　五明
先吾めと笑めくる日はおやぬの去　存計

切火して蘭すやうん福寿艸　超風
梅の枕屏風の移ふ匂の夾　麟之
三十年有智会智屏風とも　九波
元日やまゝ梅の夜をのゝず　万花
兼の冥誠〳〵寄るし花は夾　芋町
ひの〳〵雪ハ沈ふし梅の夾　了因
ゞ立やとゝり智る潮うら　米仲
大給り東風の夢あり冥方は鈴　馬指

波初る餞ゝ多梅や御手水　去留
業所を今ゝさるすやゝ戸は表　旨原
見ゝやゝゝ空ゝ蓋をゝる年　紀逸
初空の梅りて美ゝり沢の水　珠来
言砂や拙岩ゝ庭乃松ゝり　三蝶
書歳んゝ大まゝ見初度年の鈴　ノ〻
美水や形ひも清ゝ日のお山　湖雲
初夏やゝ小起ゝ井戸は者　烏有

杉ゆ[illegible]ゑ菴も英比[illegible]建　社前

黄柏乃葩黄ハ兄ゆゆの英　丹砂

末も免ゆみ人も恵の神月新　素合

杉よ松ゆ新をゆもの神ゆゆ　百尺

池畑ゆゆけゆゆ民の庭竈　松波

ゆ庶聳の東国ゆゆ花の英　雅光

春興

翠簾まけて白砂に梅の柳を　雪淀
雪も爲帽子を着たる書　雅光
競馬番帳小見えくさ人同者　吉原
酒の香をたふ紙に書る　珠来
孫むしろのまき捨て歩月　社嵐
松出る春浅柳の掃き　麟之

山を踏まくて空の秋深し　雅光
篠の火縄乃ゆくる小眠り　雪淀
あとさきに二疋の犬のそゝ切　珠来
まゝ矢を射のもゝ化粧の椌　旨原
古拵皮用も形柱もさゝめきて　麟之
埒ゝ坂乃　社嵐
世ちゝく冊ゝとゝ人　雪淀
下もゝ濤ゝ　珠来

唐猫をどこへ急ぎかしらん　旨原
世を遁るゝハ隣を我友　麟之
焼筆を茶瓶にくゆる花の絵　雅光
出ても渡る山吹の末　社嵐
鶴窠より娘泥亀をまけをちや　珠来
風のまもし小端鞴ふむ音　雪淀
あらふえし毘盧舎那仏の動を示　麟之
肩車まく帰るまゝし子　雅光

くるハしく医者の異名もきぬかるむ　社嵐
茶の湯の足袋を穿てもく　旨原
水仙の手入しま切朝ほら哉　雪淀
月ハさみしくとぬめ鳥かも　珠来
弓杖に寄衆も志をし城の月　雅光
みうきかゝる花の秋まくら　社嵐
おもひ嬉く二夕葛まもしく檜の皮　旨原
蔦まとらくる露支乃名　麟之

花ちるものうるをしき盃　社嵐

ひのまりあるうてさまる　白雅光

角田川麻酒おうりを一被り　吉原

日暮ひらすまる獅く海のうぬ　雪淀

ちるうるの浅ゆかてうる花の蕊　珠来

記源をうつを二ヶ月　沢麟之